ウィリアム・E・グリフィスから ラフカディオ・ハーンへ

～“In the Heart of Japan”～

牧　野　陽　子

一、グリフィスとハーン　～「ある保守主義者」
二、福井の朝、松江の朝
三、寺と神社　～来日外国人の印象
四、簡素な空間、豊かな自然　～十九世紀アメリカ東部の感性
五、家庭の祭壇　～“In the Heart of Japan”

一、グリフィスとハーン　～「ある保守主義者」

ウィリアム・E・グリフィス (William Elliot Griffis, 1843-1928) は明治三年（一八七〇年）に、お雇い外国人として来日した。版籍奉還、ついで廃藩置県が行われた時期のさなかのことであり、グリフィスはまず、福井藩の藩校明新館で、廃藩置県の翌年は東京に出て、大学南校（東京大学の前身）で化学を教えた。そして四年間の滞在を経てアメリカに帰国し、故郷フィラデルフィアで牧師の仕事に従事しながら、『皇国』（*The Mikado's Empire*　一八七六年）をはじめとして数多くの日本に関する著書や雑誌記事を著わした。「Japan's friend」と称されたほど（新聞の死亡記事）、親日家として知られ、またその著書は長く版を重ねた。

だが、今の日本でグリフィスの名前がそれほど広く知られているとは言えないだろう。『皇国』という、やや時代がかった印象をあたえるタイトルの代表作も、たとえばラフカディオ・ハーンやイザベラ・バードの著作と比べれば、一般に読まれることは少ない。

『皇国』は、第一部が日本の通史、第二部が滞在記であり、その中に廃藩置県前後の福井の様子が記されている。また、グリフィスが来日を決めた理由のひとつに、ラトガース大学在学中に知り合った福井藩からの留学生、日下部太郎 (1845-1870) との親交があった。そのため、明治初期のお雇い外国人教師の一人としてのグリフィスに対する近年の関心は、主として福井とのつながりにあるといえるだろう。福井での事績やグリフィス周辺の人々について、山下英一氏による詳細な研究がすすめられている。

私の場合は、ラフカディオ・ハーン(1850-1904)の中期の作品、「ある保守主義者」(“A Conservative”、『心』*Kokoro* 所収)を通して、グリフィスのことを知り、興味をもつようになった。

ハーンの「ある保守主義者」は、幕末から明治にかけての変動の時代を生きた一人の青年の物語で、そのなかで、侍としての厳しい教育を受けた主人公は、西洋文明に接して衝撃をうけ、キリスト教に改宗するものの、欧米にわたって西洋世界を流転したのち、やがて日本に戻ってくる。船上から、霊峰富士の美しさを仰ぎ見つめる主人公の感慨を描く最後のくだりは、青年の祖国回帰を象徴する場面として、良く知られている。この話のモデルが実は、雨森信成という福井の士族で、若き日にグリフィスの教えを受けていたのである。雨森は長じてハーンの友人となって、アメリカの雑誌に「ラフカディオ・ハーン、その人物」という見事な英文の追悼文を載せた。このあたりのことはすでに山下英一と平川祐弘の研究によって明らかにされている通りで、グリフィスは、福井出身の青年の物語を通じてハーンとつながりがあり、したがって、ハーンの「ある保守主義者」のなかには、グリフィスとともに福井の藩校で英語を教えていた外国人教師のクラスの様子なども興味深く描かれているのである。

グリフィスとハーンは、雨森を通じて、間接的に互いのことを認識してはいたが、直接の交流はなかった。来日の時期も、来日した時の年齢も、また来日以降の人生の歩みも異なる。グリフィスの方がハーンより七歳年上だが、ハーンより二十年前、明治の初期に来たグリフィスは二十七歳、明治中期にきたハーンはすでに四十歳。グリフィスは帰国後、来日前からの予定通り、牧師の道を進み、ハーンは日本に帰化して日本で人生を終える。

では、日本研究者としての互いの著作に関しては、どうか。

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

ハーンは、グリフィスの『皇国』を読んでいる。蔵書（富山大学のヘルン文庫）には、グリフィスの『皇国』第五版（一八八六年）と、『日本妖精物語』(*Japanese Fairy World: Stories from the Wonderlore of Japan*, N.Y., James H. Barhyte、一八八〇年）が残っているが、『皇国』の方は、おそらくは、来日前に購入し、持参したものだろう。来日の年、一八九〇年には第六版が出て、その後も二、三年おきに改版を重ねているため、後に取り寄せたものであれば、第五版ということはないからである。また「柔術」（『東の国から』所収）というエッセイのなかで、グリフィスの名をあげて、『皇国』第一部の宗教史の部分に言及している。

一方、グリフィスは、ハーンの遺著『日本　解釈の試み』(*Japan, An Interpretation*、一九〇四年）の書評を書いており、晩年の著作『ミカド』(*The Mikado: Institution and Person.* 1915) という明治天皇論のなかでもハーンのこの著に言及している。[1] 興味深いことに、グリフィスは、晩年に、再び、*Japanese Fairy Tales*（一九二三年）という題の日本の伝説集を出しており、その他にも、グリフィス一家の先祖とゆかりのあるオランダやウェールズなどの妖精物語集を集中的に出した。まるでハーン晩年の再話作品群を意識したかのようでもあるのだが、ハーンの方も『日本　解釈の試み』の装丁で、扉に「神国」という漢字をデザインとして入れたのは（そのために翻訳の邦題は『神国日本』と題された）、グリフィスの *The Mikado's Empire* の、背に金色で「皇国」と漢字で記した装丁にならったのかもしれない。つまり、両者それぞれに相手の日本研究を意識する部分があったのだろう。

そのグリフィスとハーンは、これまで、来日外国人教師としては、正反対の立場にあるととらえられてきた。科学者と文学者、キリスト者と反キリスト教。そして日本の西洋化と近代化をグリフィスは全面的に支持し、ハーンは懸念を表明した。

だが、二人の日本体験で最も大きな共通点は、日本での最初の日々を、東京ではなく、地方の一都市で過ごしたことだといえるだろう。福井も、松江も、日本海に面した城下町で、西洋化・文明化の波にのまれずに、古い文化と習慣が残っていた。グリフィスは福井で、ハーンは松江でそれぞれ一年前後を過ごしてから、グリフィスもハーンも最後は東京へと転任していった。

グリフィスの『皇国』、ハーンの『知られぬ日本の面影』（一八九四年）は、それぞれ日本に関して二人が書いた最初の本で、二人の代表作のひとつともなる。福井と松江がそれぞれの主な舞台であり、ともに、明治の日本の地方生活を描いた作品として、それぞれの時代の雰囲気と風景と土地の人々の暮らしをよくとらえている。

特に、『皇国』の第二部、日本体験記の部分は、一人の若者、二十八歳の青年の異文化体験の記録としても、極めて魅力的だといえる。そして、さらに、現代においても、日本がグローバル化社会を生き抜くための根本的な秘訣をその著作のなかに見出すこともできるのではないかと思う。

グリフィスとハーンは、一見、宗教について、日本文化の行く末について、正反対の立場にあるように見えながら、実は、その根本において、深く通じあっているのではないか。グリフィスからハーンへとつながっていく、なにか本質的なものがあるのではないか。いいかえれば、福井と松江という、日本海に面した古い土地柄のなかに、グリフィスからハーンへとつながる日本体験の根幹があるのではないか。

本論では、グリフィスの『皇国』と福井滞在時の日記の記述を、他の来日外国人、特にラフカディオ・ハーンとの比較を通じて、その魅力と現代に通じる意味を明らかにしたい。

二、福井の朝、松江の朝

一八七〇年十二月二十九日に横浜に到着したグリフィスは、年明けの翌一月二日には、任地福井へと向かう。朝霜が降りて、空気は身を切るように冷たく、晴れ渡った空に、江戸湾がきらきらと輝く美しい日だったという。上陸の際には、富士山を讃えて、「雪の衣服を着た山の女王が澄み切った空気のなかで朝日の冠を頂いている」と、来日する外国人の定番の挨拶のような言葉を記したにすぎなかった。だが横浜を出て、東海道を西へと進み始めた時、グリフィスは「（横浜の）外国の景色を後にすると真の日本が見えてくる。」「すべてが珍しい。」「詩人になって見るものすべてを表現したい、画家になって描きたい」（第二章「東海道馬車の旅」）[2]と思ったという。

『皇国』第二部は、来日直後の横浜の様子に始まり、福井赴任の東海道の旅、京都から琵琶湖経由で越前に至る旅の見聞が、青年の心地良い興奮とともに記されて、著書の中核をなす福井での体験と、日本文化論への導入の役を果たしている。敦賀を前にして福井に近づくにつれ、グリフィスは、「日本のようなユニークな文明のなかで、物を見、空気を吸うのは、精神に酸素を送る」[3]ようだとさえ思う。

そして『皇国』という作品が、明治日本の地方都市での見聞を通して、いかに見事に時代を活写しているか、これまでよく挙げられてきたのは、廃藩置県前後の出来事を記した部分、第十五章「封建制度の最後の年―私の日記から」である。「まさに青天の霹靂」と始まる七月十八日の記録は第一級のドキュメンタリーといっていい。

廃藩の知らせをうけて、城の広間に集められた藩士たちの姿、藩主松平春嶽の別れの言葉、人々の対応など、間近でみた城内の様子の迫真あふれる描写が続く。

だが、そうした緊迫感ある場面以外にも、この日記形式の第十五章には、小さな、だが魅力的な記述が随所に散見される。たとえば　七月十六日の記述は、こう始まる。

今朝、ヤンキー・ランプとペンシルヴァニア石油の缶を持って寺へ行く僧侶にあった。啓蒙の光の象徴のように見えた。今日、男が川で溺れた。河童が引いたという。(4)（山下英一訳。以下同）(This morning I met a Buddhist priest carrying a Yankee lamp and a can of Pennsylvania petroleum to the monastery. It seemed a symbol of more light. A man was drowned in the river today. The people say a kappa dragged him down.)

つづけて、グリフィスが見に行った河原の縁日の描写があり、芸人の一座による蛇使いや亀使い、剣の芸やジャグラー、力自慢など、面白い見世物や芸が列挙される。そして、「夜になると、美しい灯りの飲食の屋台や小舟で川岸が想像に絶するほど賑やかであった。」(At night, the gayly illuminated refreshment booths and boats made the strand and river as lively as the imagination could well conceive.) と述べて、何里も続く人の列と、祭りの華やかさに見入っている。

グリフィスが見た祭りは、“the matsuri in honor of the patron deity of the city” だという。グリフィスが暮らした福井の足羽地区の氏神さまの祭礼だったのだろう。冒頭に登場する、ランプと石油の缶というまさに文明の利器

を持った僧侶の姿が面白い。そのお坊さんが土手の上の道を小走りにお寺へ急ぐ。だが、その土手の下の川では、河童が男を暗い水底へと引き込み、一方河原では縁日が賑わいを見せている。どこか、河童と農民の田園風景を好んで描いた日本画家小川芋銭（一八六八年―一九三八年）の墨絵や影絵のような味わいのある場面だといえよう。ここでは祭りを背景に、文明と土俗、光と闇、生と死、静けさと喧騒が交差して、場面の切り取り方が見事である。そしてグリフィスが実際に記した日記の記述[5]と照らし合わせて見ると、『皇国』のこの一節は、七月十二日から十五日までの数日の見聞の断片を、ひとつの場面に巧みにまとめあげたものだということがわかる。

ところで、ラフカディオ・ハーンもまた、『知られぬ日本の面影』に収められた「神々の国の首都」という作品のなかで、松江の大橋川の橋の華やかな開通式を描いたあとで、昔の大橋の人柱の伝説と、今なお夜に鬼火が飛び交うさまを記した。紀行文に、その土地の過去のエピソードや民俗学的知見を挿入することで深みを与えるのは、ハーンが得意とした手法だった。だが、グリフィスもまた、福井への赴任の道を、「歴史、地方色、伝説について聞きながら[6]」進み、神武天皇の伝説から、平清盛、楠正成、伏見の戦い、信長のエピソードなどに言及している[7]。そして、グリフィスの足羽川の祭りの場面が、大橋川を描くハーンの筆致を連想させるのは、どちらも町を流れる川の風景に、現在と過去が交差するからである。

興味深いのは、グリフィスとハーンが、福井と松江の印象と異国の地で暮らす感慨を、それぞれ〝最初の朝〟という設定で記していることだろう。二つの朝の描写は、二人の共通性と同時にそれぞれの個性がうかがえる文章となっている。

まずグリフィスの文をみてみよう。『皇国』第八章「大名の歓迎　私の学生たち」は冒頭、こう始まる。

翌日は安息日のない土地での安息日であった。目をさますと上天気である。空は青く雲ひとつない。あたりは静寂そのもの。福井の日曜日をいかに過ごそうか。何もかも、ないものばかり—鳴り響く教会の鐘、教会、会堂の腰掛け、講壇、市内電車、舗道、日曜学校、親友。私は庭の門まで歩いて外の通りを眺めた。あいかわらず、忙しそうに大勢の人が行き来していた。武士は下駄ばきに絹の紋付き、帯に刀をさし、きれいに剃った頭に髷をつけて、社会の主のように威厳を保って歩いていた。僧侶は剃髪に金欄の襟にゆるやかにたれた縮緬を着て、手首に数珠を掛けて寺へ行くところであった。商人は地味な綿入れの着物に、足にぴったりの股引（ももひき）と白い鼻緒の藁草履をはいて、商いのことを考えている。人足は上半身が裸で、下半身をエデンの園の布地でおおい、藁草履に、法被、笠掛けで、体をてこ台にしてよろけながら重い荷物を天秤のように運んでいった。人足仲間が洗い盤をふせたような笠をかぶり、川辺で何か重労働をしているのか、並んで丸太に座って休んでいた。遠目には、大きなきのこの列のように見えた。行商人が売り声をあげながら魚、野菜、油、豆腐を売ってぶらぶら歩いている。向う岸には肩に綱をかけて藁をまとった男の仲間—驟馬ではない—が流れにさからって川上に舟を引いていた。(8)

The next day was a Sabbath in a Sabbathless land. I awoke to find a perfect day a heaven of cloudless blue, and everything quiet and still. How should I spend Sunday here ? There were no church- bells pealing, no church, no pews, no pulpit, no street -cars, no pavement, no Sunday-school, no familiar friends. I walked to the gate of the court-yard and looked upon the street. Business and traffic were going on as usual. The samurai on clogs, in his silk

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

and crested coat, swords in girdle and cue on clean -shorn crown, was walking on, in his dignity, as the lord of society. The priest, in his flowing crape and brocade collar, with shaven head, and rosary on wrist, was on his way to the temple. The merchant, in his plain, wadded cotton clothes, tight breeches, and white -thonged sandals of straw, was thinking of his bargains. The laborer, half naked and half covered in the fabrics of Eden, in sandals of rice-straw, tunic, and hat, making himself a fulcrum for his scale-like method of carrying heavy burdens, passed staggering by. A file of his brethren, with hats in the shape of inverted wash-bowls, engaged on some heavy work at the river-side, were resting on a log, looking, in the distance, like a row of exaggerated toad-stools. The seller of fish, vegetables, oil, and bean-cheese, each uttering his trade-cry, ambled on. On the opposite shore, with ropes over their shoulders, a gang of straw-clad men not mules were towing a boat up stream, against the current. ("Reception By The Daimio: My Students")(9)

グリフィスは、このように、福井で迎えた最初の日の朝を描く。目が覚めて、日曜日、「安息日のない土地での安息日」だと思いながら空を眺めると、雲ひとつなく澄みきった青い世界が広がり、静寂に包まれている。グリフィスは、ここにはない、故郷の教会の鐘の響きや、教会へと向かう人々の姿、日曜学校の子供たちを心の中に思い描く。異国の安息日をどう過ごすべきか、一瞬とまどうが、庭に出て外をみれば、往来をゆく人々、武士、僧侶、商人、人足の姿があり、行商人が野菜・油・豆を売り歩く声も聞こえてくる。川べりで作業をする人々、川の向こう岸の景色へと、グリフィスの視野は広がってゆく。

では、ハーンの「神々の国の首都」はどうか。松江の一日の始まりを描いた冒頭部分は、おそらくハーンの文章のなかでも最も良く知られた一節だろう。

松江の一日で最初に聞こえる物音は、ゆるやかで大きな脈拍が脈打つように、眠っている人のちょうど耳の下からやって来る。それは物を打ちつける太い、やわらかな、にぶい音であるが、その規則正しい打ち方と、音を包み込んだような奥深さと、聞こえるというより寧ろ感じられるように枕を伝わって振動がやって来る点で、心臓の鼓動に似ている。それは種を明かせば米搗きの重い杵が米を精白するために搗き込む音である。……（中略）……杵が臼を打つ規則的な、にぶく鳴り響く音こそは日本人の生活から生まれる物音のうち最も哀感を誘うものと私には思われる。実際それはこの国が脈打つ鼓動そのものである。

それから禅宗の洞光寺の大釣鐘がゴーン、ゴーンという音を町の空に響かせる。次に私の住む家に近い材木町の小さな地蔵堂から、朝の勤行の時刻を知らせる太鼓の物悲しい響が聞こえてくる。そして最後には朝一番早い物売りの呼び声が始まる。「大根やい、蕪（かぶ）や蕪」と大根そのほか見慣れぬ野菜類を売り回る者。ぞうかと思えば「もややもや」と悲しげな呼び声は炭火をつけるのに使う細い薪の末を売る女たちである。（森亮訳）[10]

ハーンが、松江で迎えた最初の夜明けに耳にし、体で感じるのは、米搗きの杵の音である。その音は大地の底から響いてきて、まさに日本の生活を下から支える音、この国が脈打つ鼓動そのものだと、ハーンは思う。〝杵

築〟、つまり古代の神話世界につながる出雲の国で聞く杵の音は、いわばハーンの考える神道を象徴する響きでもあるのだが、その神道の音のあとに、仏教のお寺の大きな鐘を打ちならす音が、次に町の小さな地蔵堂の太鼓をたたく音が聞こえてくる。そして続くのは、グリフィスの福井の朝と同じように、往来を行く、さまざまな物売りの声である。

その後ハーンは障子をあけて、朝焼けの空と向こう岸の山々、宍道湖の情景を描く。川岸から、人々が朝日を拝む柏手の音が聞こえてきて、やがて大橋をわたる人々の下駄の音にかわり、一日の営みが始まったことがわかる。

これら二つの朝の描写を読み比べてみて、面白いと思うのは、二人とも、夜が明けると、まず宗教にかかわる想像をめぐらすということである。グリフィスは故郷の日曜の教会を思い、ハーンは、地元に息づく神道と仏教の存在を感じ取っている。そしてさらに、そうした感覚の広がりのなかで、実際にふたりの目に映じる光景として続くのが、往来を行く人々の姿であり、地元の物産を売る物売りの声なのである。

つまり、共通するのは、宗教と生活。宗教という魂の領域と、人々の日々の生活の情景、この二つの領域が、おのずとつながっていくのであり、二つが結びついて、ひとつになったところに、グリフィスとハーン双方の関心が赴くといえるのではないか。

それは、生活のなかに根付いているもの、根底で支えている宗教的なるもの、といいかえてもいい。グリフィスの『皇国』の目次をみると、「子供の遊び」、「生活の中の迷信」「ことわざ」「神話上の動物」「民話」「日本の家」といった章が並んで、ハーンが来日前に雑誌の編集者あてに送った執筆予定の項目一覧とよく似ている。一

言でいえば、民俗学、フォークロアの領域であり、ハーンが重点的に執筆した関心分野と重なる。二人の朝の描写が似てくるのも、不思議ではないのかもしれない。

もちろん、それぞれの持ち味と、感性の違いはある。ハーンは、目に見えるものではなく、米搗の杵、寺の鐘、地蔵堂の太鼓、人々の柏手など、もっぱらの音のひびきに耳を澄ませて、より感覚的に、どこか深い奥底からくるものをつかみとろうとしている。対して、グリフィスのとらえ方で印象的なのは、あるべきものが〝ない〟、と懐かしく思うのが、教会堂での集いだということではないか。つまり、キリスト教の教義そのものではなく、教会に集う人々の、晴れの日の様子を思い描く。講壇の牧師、ベンチの人々、傍らの親友。具体的で人間的、社交的とさえいっていいイメージである。そして今、道を行く朝の人々の描写も、ハーンが、下駄の響き、物売りの声やその言葉の響きの面白さに注目するのに対して、グリフィスは、もっぱら、そうした人々の姿、服装や、仕草、動きを視覚的に描いている。

グリフィスの『皇国』では、たとえば、福井赴任の途中で出会った茶屋の娘や宿屋の女中（第七章「日本の奥地にて」）、福井の家で一緒に過ごした召使の佐平や、その妻、子ども、子守の少女、雑用係の少年などの人物描写が実に生き生きして、面白い（第九章「日本の家での生活」）[11]。福井藩主松平春嶽公や殿様の子供、藩の若侍たちの姿も、そうした庶民の姿のなかに自然に混じって描かれている。それらの個所をひとつひとつここで挙げていきたいほどだが、グリフィスは、基本的に、〝人〟が好きなのであり、人々がそれぞれの日常のなかで生活する、そういう生身の人間の姿が好きなのだといえるかもしれない。

三、寺と神社　～来日外国人の印象

グリフィスは、お雇い外国人教師として、西洋文明がもたらす進歩を肯定し、全幅の信頼を寄せた人だった。「一八七一年の日本の進歩の記録は素晴らしい。……（中略）……進歩はどこへ行っても合言葉だ。これが神のみわざでなくてなんだろう。」[12]と、第十五章「封建制度の最後の年――私の日記帳から――」の最後に述べて、高らかに日本の未来への期待を記した。日本を“The Mikado’s Empire”（「みかどの国」）、すなわち「皇国」と称したのも、グリフィスにとって〝みかど〟とは文明開化の期待の星であり、進歩、新しさ、近代性の代名詞だったからに他ならない。

西洋が日本に及ぼす影響をどう評価するかは、ハーンとグリフィスの考えがほぼ正反対といっていいほどに異なるところなのだが、『皇国』にみられるグリフィスの文明観は、十九世紀中程における、ごく一般的な、常識的なものだといえる。来日外国人のほとんどすべてが、文明すなわちキリスト教文化、と確信していた時代のことである。

グリフィスは、アメリカ東部のラトガース大学を卒業して神学校にいたところを、化学の教師として福井に招かれた。推薦したのは、大学南校で教えていたオランダ改革派の宣教師のフルベッキだった。グリフィスが日本行きを受諾したのは、前述したように、ラトガース大学で福井藩の日下部太郎ほかの日本人留学生と親交を結んでいたからでもあったが、キリスト教と文明の伝道の使命感が基本にあることは、間違いないだろう。そしてグ

リフィスは、キリシタン禁止の高札がまだ残っていた福井時代は、布教は控えていたものの、福井を離れ、横浜に戻ると、宣教活動に関わりはじめる。アメリカに帰国後は牧師として生活した。

そうした事実をふまえて『皇国』を読むと、予想外という印象を受けるのは、グリフィスの、日本の宗教の捉え方である。つまり、宣教師を志す若者でありながら、日本の寺や、祭り、特に神社に関する印象、言説が、当時の他の外国人の（特に宣教意識の強い人の）平均的な感想と全く異なって、否定的ではないからである。

たとえば、グリフィスは、東京にくると、「日本人にとって大事なものをすべて見たい」（第六章「新生日本の人々の中で」）[13]と思って、王子、目黒、高輪、亀戸、芝、上野、向島、善福寺などを次々と尋ねる。そして、グリフィスは浅草の浅草寺で、寺周辺の賑やかさと楽しそうな参詣者の様子に目をとめるのである。参道の両側に様々な店が並び、音楽や踊りがあり、料理屋が並ぶ。着飾った老若男女が食べたり、煙草をすったり、踊ったり、あらゆる楽しい遊びに興じ、おもちゃや人形など子供の喜ぶものもたくさん売っている。「浅草では毎日が祭り」で、「永遠に続くクリスマスのようだ」とグリフィスは驚く[14]。そして、こう問う。「日本人の心には、このように寺と遊び場が密接しているのが不調和ではなくて、供え物の箱に現金を投げて拝むのは、にぎやかに騒いだり静かに遊んだりするための序幕にすぎない。日本では、宗教と無邪気な楽しみが手をつないでいるが、日本人のこういうやり方は、間違っているだろうか[15]。」と。

さきほど、グリフィスは人間が好きだったに違いない、と述べたが、福井日記をみていると、実に社交的な人で、ほとんど毎日、およそ二日に一度は、人の家を訪ね、または来客を迎え、食事をしている。そして最後に〝楽しい一日〟と結ぶ。お寺のお坊さんもたびたびグリフィスを訪ねてきて、夕食をしている（例えば十一月五日、

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

十一月十九日、十一月二十日[16]。時には、宗教の話もしたらしいが（例えば十月八日、十月二十九日[17]）、中身は記されてないのが、残念である。真宗大国の福井で、僧侶とどのような問答をかわしたのか、知りたいものだと思う。

お寺や、様々な地元のお祭りにもほとんど毎日といっていいくらい顔をだしているので、逆に、当時の福井では、一年中これほど頻繁に神社仏閣の縁日があったのだろうかと、驚くほどである。先に引用した文にも、祭りの場面があったが、内乱の戦死者の慰霊の祭りで花火をみた十一月一日などは、「最高に美しい日。」「書いて、読んで、昼夜の美しさを楽しんだ。」と記している[18]。まるでスタンダールの墓碑銘「生きた、書いた、愛した[19]」のような充実感ではないか。

一月六・七日の親鸞遠忌（おんき）の日も、「聖書を読んだあと、寺に行った」とある。こういう記述を読むと、グリフィスは基本的に、宗教の場であれ、人の活気、大勢の人の活力を良しとしたのではないかと思う。お祭りでも、宗教が活きて、生活のなかに根付いていることを実感したのではないか。その点で、同じくお盆の盆市の賑わいを描いた、エドワード・モース（Edward Sylvester Morse 一八三八年―一九二五年、大森貝塚の発見で知られるアメリカの動物学者）とも、ラフカディオ・ハーンとも、見る所が異なるといえる。モースは市に並ぶさまざまな品物、工芸品などの豊かさに目を見張り（『日本その日その日』*Japan Day by Day*、一九一七年）、ハーンは、お盆が死者の祭りであることに思いをはせ、霊の世界の方へと想像が移行していくからである[20]。（「盆市にて」“At the Market of the Dead”、『知られぬ日本の面影』）

日本の寺のにぎやかな参詣の様子は、実は他にも多くの人が記している。グリフィスの七年後、一八七八年にやはり浅草寺を訪ねた英国の女性旅行家イザベラ・バード（Isabella Lucy Bird、一八三一年―一九〇四年）も、グリ

フィスと同じような光景を描写し、だが、次のような感想を述べた。

そこでもまた彼らはお祈りをする――もしわけもわからぬ外国語の文句をただ繰り返すだけでお祈りと呼ばれてよいものならば。彼らは頭を下げ、両手をあげてこすりあわせ、言葉をつぶやきながら数珠をつまぐり、両手を叩き、また頭を下げる。それが終わると外に出るか、あるいは別の仏の前に行って同じことを繰り返す。絹の着物を着た商人、フランス式のみすぼらしい軍服を着た軍人、百姓、卑しい衣類の人夫、母や娘、洋服姿の洒落者、武士のような警官たちも、この慈悲の女神（観音）の前に頭を下げる。たいていお祈りは急いでなされる。長い気楽なおしゃべりの間にはさまれた単なる一瞬の間奏曲にすぎず、敬虔のそぶりすらない。しかしなかには、本当の悩み事を、簡単な〝信心〟で解決しようという祈願者もいるようだ。(21)

(There, too, they pray, if that can be called prayer which frequently consists only in the repetition of an uncomprehended phrase in a foreign tongue, bowing the head, raising the hands and rubbing them, murmuring a few words, telling beads, clapping the hands, bowing again, and then passing out or on to another shrine to repeat the same form. ……Merchants in silk clothing, soldiers in shabby French uniforms, farmers, coolies in "vile raiment," mothers, maidens, swells in European clothes, even the samurai policemen, bow before the goddess of mercy. Most of the prayers were offered rapidly, a mere momentary interlude in the gurgle of careless talk, and without a pretence of reverence; but some of the petitioners obviously brought real woes in simple "faith." (Letter 5, *Unbeaten Tracks in Japan*、一八八〇年))(22)

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

バードは英国で牧師の娘に生まれ、敬虔なクリスチャンとして伝道活動も行った人だった。そのバードの目には、浅草の寺の賑やかさは真面目な信仰とは別種のものと映った。大勢の人々が詣でるとはいえ、みな祈りは手短に済ませ、気楽なおしゃべりに興じている。そこに信心深さなど全くない、と、さぞ苦々しい表情を浮かべていただろうことが、その文章からうかがえる。

一方、ラフカディオ・ハーンは、同じような寺の情景について、何と記しているか。ハーンも、一八九〇年の来日当初、まずは横浜やと東京の寺を見て回っている。そして「地蔵」（『知られぬ日本の面影』）という文章のなかで次のように述べている。

そんななかで、私が何よりも強い印象を受けたのは、人々の信仰心のいかにも楽しげな様子だった。暗さ、厳粛さや自己抑制といったものは、彼らには全くみられなかった。厳かさ、いやそれに近いものさえ、露ほども感じられなかった。明るい寺の境内や本堂の階段にまで、大勢の子供たちが賑やかに笑いさんざめき、奇妙な遊びに興じている。本堂の中にお参りに入る母親たちは、赤ん坊が畳敷の上をはいまわり、きゃっきゃっと声をたでても気にとめない。人々は彼らの宗教を気軽に、陽気に受け止めているのである。大きな賽銭箱にお金を投げ入れ、柏手を打ち、短い祈りの言葉を唱えると、彼等はすぐに向きかえり、お堂の上がり口で笑顔で語りあいながら、小さな煙管をふかすのである。いくつかの寺では、参詣者たちが中に入りもしないのに私は気付いた。自分たちが創りだした神々、それを畏れすぎることのない彼らこそは実に幸いである。(23)

ハーンもまた、人々の祈りの短さ、楽し気な談笑、子供たちの遊びなど、似た要素を指摘し、宗教の場らしい「厳かさ」がないと述べている。だが、ハーンはバードとは異なって、人々の「信仰心のいかにも楽しげな様子」を「暗さ」や「自己抑制」から解放された、つまり明るく、心のびやかな宗教のありかたとしてとらえた。グリフィス、バードとハーンは、一八七一年、一八七八年、一八九〇年と年代こそ少々異なるが、同じように日本の寺の参拝風景に目をとめた。ハーンは周知のように、子供のころ大叔母によって押し付けられたキリスト教教育の厳しさに反発し、宣教師の言動にも批判的だった人だから、日本のお寺でこのような感想を述べるのは、理解できる。三者の感想を並べてみると意外なのは、グリフィスが、バードではなく、ハーンの方に近い受け止め方をしていたことなのである。

まるで、グリフィスが、「日本では、宗教と無邪気な楽しみが手をつないでいるが、日本人のこういうやり方は、間違っているだろうか。」(Religion and innocent pleasure join hands in Japan. Are the Japanese wrong in this ?) と問いかけ、それに対してハーンが「いや、間違っていない。自分たちが創りだした神々を畏れすぎることのない彼らこそは実に幸いである (Blessed are they who do not too much fear the gods which they have made!)。」と、答えているかのように、二人の言葉は、呼応している。

そして、グリフィスがさらに、当時の大方の外国人とはかけ離れた感想を記すのは、神社に関する描写なのである。

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

たとえば、福井への赴任の旅の途中、グリフィスは京都、八幡村の石清水八幡宮とおぼしき神社に立ちよる。グリフィスはこの神社を訪問した最初の外国人だった。その時のことが、こう記されている。

長い石段を登りつめると、台地になっていて、頭上にアーチ状にかかる松の木の長い路には高い石燈籠が並んでいた。その通路から神社の正面に出た。二人の神主が真っ白な衣を着て、黒い漆塗りの高い帽子をかぶって出てくると、魚や果物などの食物の供物を三方の真っ白な紙にのせて祭壇に置いた。全く清潔で、飾り気のない簡素な本堂にその祭壇があり、刻み目のある白い紙の紐がさがった御幣だけがその上に置いてあった。

偶像も聖像も画像もない。御幣と供物があるのと、白い衣の神主が祈祷しているだけである。強い印象を与える簡素さ、立派に生長した古い昔の木に囲まれた世間から離れた山の上の場所、美、静寂、それらがひとつになって、日本の参拝者同様に、外国の見物人の心にも、崇敬と畏敬の念が浸み込んできた。仲間が草履をぬいで、頭を下げ、両手を敬虔に合わせると同時に、外国人は帽子をとり、靴をぬいだ。(「日本の奥地にて」、"In The Heart of Japan")[24]

Ascending the last of many flights of stone steps, we stood upon a plateau. A long avenue arcade, with overarching pines, and lined with tall stone lantems, led to the temple facade. Two priests, robed in pure white, with high black lacquered caps on their heads, were bearing offerings of fish, fruit, and other food, to place upon the altar, each article being laid on a sheet of pure white paper, or ceremonial trays. In the perfectly clean and austerely

simple nave of the temple stood an altar, having upon it only the gohei, or wands, with notched strips of white paper dependent.

There were no idols, images, or pictures, only the gohei, the offerings, and the white-robed priests at prayer. The impressive simplicity, the sequestered site on a lofty mountain surrounded with tall trees of majestic growth and of immemorial antiquity, the beauty, the silence, all combined to instill reverence and holy awe alike in the alien spectator as in the native worshiper. The head of the foreigner uncovered, and his feet were unshod simultaneously with the unsandaling of the feet, the bowing of the head, and the reverent meeting of the palms of his companions.(25)

グリフィスは、森の木々に囲まれた簡素な神社のたたずまいに感動を覚えた。もちろんグリフィス自身は拝礼するわけではないが、帽子はとる。そして、同行者が柏手を打つさまをみて、心うたれる。

印象的なのは、繰り返される、clean、simple、simplicity という言葉だろう。神社（ちなみに shrine ではなく temple とあるが、当時はチェンバレンも Shinto temple と記している）は “perfectly clean and austerely simple”、つまり「全く清潔で、飾り気のない簡素」な空間であり、そこには “no idols, images, or pictures” すなわち「偶像も聖像も画像もない」。その簡素さのなかで目に映えるのは真っ白な御幣と、供物を乗せる白い紙、そして真っ白な衣の神主の姿で、ここでも、pure white という形容の繰り返しが純白の清々しさを際立たせている。グリフィスは、そうした、「強い印象を与える簡素さ」(impressive simplicity) が、「太古から続く堂々たる針葉樹の巨木」(tall trees of majestic growth and of immemorial antiquity) と響きあって、深い森の自然の中に、美と静寂と神秘の空間を作り上げ

ている、と感じた。そのとき、日本の参拝者同様に、「崇敬と畏敬の念」(reverence and holy awe) が心の中に満ちてきた、とグリフィスは言うのである。この場面の表現は、なかなか興味深い。グリフィスは当初みずからを“alien spectator”として、“native worshiper”に対峙させている。だが、簡素な人為と悠久の自然が響きあう空間によって、神秘の感覚が満ちていくのを感じたとき、図らずも、帽子をとり、靴を脱いだ。その行為を、たとえば、took off his hat, took off his shoes などとせずに、“head uncovered”, “his feet unshod”という、「私」という行為者を消した受け身の表現にすることで、湧き上がった畏敬の念による、ほとんど無意識の自然な行為であったことがわかる。また、“uncovered”、“unshod”という言葉は、体を覆っていた帽子や靴といった外的な殻のようなものがそがれて、内なる素のままの心があらわにされていった過程をも示唆するといえるかもしれない。そして、それは同行者が草履を脱ぐ (unsandaling of the feet) 行為と、気づいたら同時のこと (simultaneous) であった。このとき、グリフィスのなかにおける、“alien”対“native”、“spectator”対“worshiper”という対峙はなくなっている。この場面を結ぶ、“the reverent meeting of the palms”という語句は、もちろん、同行者が敬虔に両手を合わせる様をいう。だが meeting of the palms、「二つの手のひらの出会い」という表現には、バードのように“clapping of the hands”, “rubbing of the hands”ではなく、この言葉を選んだグリフィスにとっての、二つの宗教の出会いと融和がほの見えるように思えるのである。

そしてグリフィスは次に、武生で神社に立ち寄ったときも、より簡略に、同趣旨のことをこう述べている。「立派な古い大杉の森の中に、簡素な神社が立っていた。偶像、肖像、絵などはなく、白い紙切れと磨いた鏡だけがあった。私の護衛が立ち止まって、三度手を打ってその手をうやうやしく合わせると頭を下げて祈りを唱え

た。この行為は単純なだけにいっそう感動的であった」[26] (Emerging into the road to Fukui, we came to the stone portal of a large Shinto temple. Within a grove of grand old giant firs stood the simple shrine, without image, idol, or picture, save only the strips of white paper and the polished mirrors. My guards stopped, clapped their hands three times, placed them reverently together, bowed their heads, and uttered a prayer. The act was as touching as it was simple.)[27] ここでもグリフィスが強調するのは、太古の自然と、簡素な神社の作りであり、人々の祈りの形の素朴さに感動したことである。

グリフィスの『皇国』のこのようなくだりを読んで、私は非常に驚いた。というのも、グリフィスの文章と感性が、やはりここでも、ラフカディオ・ハーンが神社や神道について述べた文章とあまりにも似ているからだ。ハーンは神社に至る参道の空間の魅力について、たとえば、次のように述べている。

> 数ある日本独特の美しい事物の中でも最も美しいのは、参拝のため、あるいは休憩のための小高い場所に上って行く途中の道である。それはいわば、何でもない所に通じる道、無に至る階段である。……（中略）……上への道は、まず両側に巨木の並ぶ緩やかな坂道で始まる。間〻に置かれた石の魔物が行く道を守っている。うっそうとした緑の中を通って、さらに古い大木の陰になった台地へと通じ、そこからはまた次の台地へと、どこまでも薄暗く上っていく。それを登って、登って、登りつめると、ついに灰色の鳥居の向こうにめざすゴールが現われる。がらんとしだ、白木造りの小さな祠、神道のお宮である。荘厳な長い道のりを経た末に辿り着く、静まり返った暗い世界のただなかで、空虚さを見出す驚き！ これこそまさに霊妙そのものである。（「旅の日記から」“From a Traveling Diary”『心』[28]）(Of all peculiarly beautiful things in Japan, the most beautiful

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

are the approaches to high places of worship or of rest, –the Ways that go to Nowhere and the Steps that lead to Nothing.…… Perhaps the ascent begins with a sloping paved avenue, half a mile long, lined with giant trees. Stone monsters guard the way at regular intervals. Then you come to some great flight of steps ascending through green gloom to a terrace umbraged by older and vaster trees; and other steps from thence lead to other terraces, all in shadow. And you climb and climb and climb, till at last, beyond a gray torii, the goal appears: a small, void, colorless wooden shrine, –a Shinto miya. The shock of emptiness thus received, in the high silence and the shadows, after all the sublimity of the long approach, is very ghostliness itself.)

ハーンはここで、鬱蒼たる緑のなかを進む参拝の道は“the Ways that go to Nowhere”、“the Steps that lead to Nothing.”（「無に至る階段」）であり、その到達点として“a small, void, colorless wooden shrine, –a Shinto miya.”（「小さく、からっぽの、色のない木の祠、神道のお宮」）が現れるのだという。そして、そこで人は、“shock of emptiness thus received”（「空虚の発見の衝撃」）に包まれる。いわば、自然のなかで人間が人工的なものを削ぎ落としながら、「無」と化し、自然と一体化して昇華されていくような空間を、ここに見出しているのである。ハーンはそのような神社空間こそ、“ghostliness itself”（「霊妙そのもの」）の世界だと表現した。

グリフィスもまた、ハーンほど自覚的ではないものの、同じ感覚で、森のなかの神社の空間に浸っていたことが先の文章から察せられる。また、グリフィスは神社が“without image, idol, or picture”（「偶像も聖像も画像もない」）ことを指摘していたが、当時は多くの来日外国人が、そのように神道の特徴を捉えていた。ただし、神道の欠点としてあげていた。

たとえば、よく知られているように、バジル・ホール・チェンバレンは、『日本事物誌』のなかの「神道」という項目で次のように記している。

「神道の文字通りの意味は、「神の道」であり、仏教が入って来る前の神話や漠然とした祖先崇拝と自然崇拝に対して与えられた名前である。……神道は、しばしば宗教として言及されているが、……その名（宗教）に値する資格がほとんどない。神道には、まとまった教義もなければ、神聖な書物も、道徳規約もない」(Shinto, which means literally "the way of the gods," is the name given to the mythology and vague ancestor and nature-worship which preceded the introduction of Buddhism into Japan, ...Shinto, so often spoken of as a religion, is hardly entitled to that name. It has no set of dogmas, no sacred book, no moral code.)。そして、「神道自体は根無し草であったので、あまりにも空虚で貧弱なもので、人々の心に訴えることができなかった」、「神道の社殿は、原始的な日本の小屋 (primeval Japanese hut) を少し精巧にした形態で存続している……仏教のお寺と異なり、神社は茅葺の屋根で、作りも単純で、内部は空虚である(the Shinto temple is plain and empty)」[29]とたたみかけ、伊勢神宮についても、「日本の歴史と宗教を学ぶ著にとって、伊勢は磁石のように心ひかれる言葉である。しかし一般の観光客がわざわざこの神道の宮を訪ねて得るものがあるかといえば、大いに疑わしい。神道は頑なに厳格な建築的単純性に固執している。檜の白木、茅葺きの屋根、彫刻もなく、絵もなく、神像もない、あるのはとてつもない古さだけ。」（「伊勢」[30]）と述べた。

またチェンバレンだけでなく、グリフィスが親しくしていたアメリカ人、ジェームズ・C・ヘップバーン（ヘボン博士）も「私も神道の正体を見極めようと懸命に努力したが、価値あるものは何も見つからなかった。」と述べ、宣教師仲間のサミュエル・R・ブラウンも「これをどうして宗教と称しえるのか、私は理解に苦しむ。神道

は宗教として見た場合、これまで人類に知られたいかなる宗教と比較しても、内容空疎で、無味乾燥である。」（『日本アジア協会紀要』）と述べていたことが知られている。[31]

つまり、「偶像も聖像も画像もない」がゆえに、あまりにもすべてがシンプルすぎるゆえに、神道は宗教としての魅力がない、というのが、彼らが共有する認識であり、先にあげたグリフィスの受け止めかたとは、正反対だということがわかる。

このような神道論に対してハーンが、

「神道には哲学はない。体系的な倫理も、抽象的な教理もない。しかし、そのまさしく「ない」ことによって、西洋の宗教思想の侵略にに対抗できた。」「神道を、およそ宗教とは言い難いものだという者もあるが、学者たちがなかなか神道を解きあかせないのも、畢竟、彼らが神道の源泉を書物ばかりに求めているからである。」「しかし、現実の神道は、書物の中に生きているのではない。儀式や戒律の中でもない。あくまで国民の心の裡に息づいているのである。」（「杵築」『知られぬ日本の面影』）[32]

と、反論したことも周知の事実である。

そして、グリフィスは、宣教師を志しながら、後のハーン同様に、神道が、書物や聖像など、いわば人為的所産として構築された教理や表象物を排して、森の樹々とともにあること、簡素さをこそ旨とすることを察した。簡素な神社建築と庶民の素朴な祈りの形を見て、チェンバレンなどと異なって、神道全体の醸し出す雰囲気の宗

教性を感じ取る感性があったということができるだろう。

だが、なぜだろう、と考えてしまう。どういう背景があって、お寺や神社をそのように受け止め、ひいては日本の宗教に理解を寄せることができたのだろう、と。

ハーンの場合は、もっぱらその生い立ちに、日本の神々の世界にひかれる素地があったと、説明されてきた。ギリシャ人の母親の記憶、アイルランドでの子供時代など、ギリシャ神話やケルト民話の多神教世界に親しみ、また、母と自分を捨てた父親への反発が、近代西洋的価値観の境界を越えさせた、と。

ではグリフィスの場合はどうなのか。グリフィスは、アメリカ東部の保守的な風土のなかに生まれ、育ち、敬虔なキリスト教徒の母親の願いをそのまま素直に受け入れて牧師の道を進んだ人である。日本に至るグリフィスの人生に、ハーンのような葛藤や、西洋社会への反発や疑問はほとんどみられないのである。

四、簡素な空間、豊かな自然　～十九世紀アメリカ東部の感性

グリフィスが、なぜ神社の素朴さに感動したか。なぜそのような捉え方ができたのか。もしグリフィスの背景にあえて、いくぶんの理由を求めるとすれば、考えられるのは〝清潔〟という概念、そして〝自然観〟ということになろうか。

たとえば、グリフィスは日本の町と庶民の生活の清潔さに感嘆する。東海道を西へと旅しながら、「普通の日本人は、少なくとも一日一回は湯に入る。」「どのアジア人よりも身なりも住居も清潔である。」（第二章「東海道馬

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

車の旅[33]」と記す。

もちろん、日本の街や道路、住まいの清潔さを指摘する来日外国人はきわめて多い。たとえば、ペリー提督は日本の道の清潔さに「汚物どころか塵ひとつなく、中国の都市という都市の不潔ぶりとは雲泥の差だ[34]」と驚き、下田の町について「清潔と衛生に非常に配慮されているという点で、我々が誇る文明国よりもずっと先を行っている[35]」と述べている。エドワード・モースも、「あらゆる階級を通して、人々は家の近くの小路に水を撒き、短い柄の箒で掃き清め」、欧米と比べてゴミや廃棄物の処理がうまくなされており、それゆえ衛生的で、病気が少ないとして、人々の風呂好き、綺麗好きに感嘆した[36]。一八八九年に世界一周早回りの企画で、日本に立ち寄ったアメリカの女流ジャーナリスト、ネリー・ブライ（Nellie Bly、一八六四―一九二二）も、中国と比べた街のこぎれいさに目を見張った[37]。

彼らの記述に共通するのは、〝清潔〟、すなわち衛生を、文明の証、文明の指標とみなす考え方が背後にあるということだろう。そして、グリフィスが日本の生活空間の清潔さと、またさらに神社空間の簡素さをよしとするのも、ある意味では根底で通じ合う感覚なのである。clean で simple な建築空間は、チェンバレンやバードなどヴィクトリア朝大英帝国の人よりは、新大陸のピューリタン的な感性の人に訴えかけ、親近感を覚えさせるものだったといえるのかもしれない。

今ひとつ指摘できるのは、グリフィスが、自然を尊び、自然と人との親密なる空間に感じ入る人だったことである。

『皇国』のなかでも、たとえば越前へと向かう真冬の雪の山道の描写では、谷や田圃に見え隠れするコウノト

リや兎、狐、鴨、雁、白鷺、猪、猿など様々な動物の姿が描かれていて（七章「日本の奥地にて」[38]）、今はもうない豊かな自然、動植物と共存する世界がここにはあったのだと、気づかされる。日本沿岸に生息する貝類の豊富さを目当てに来日した生物学者モースにも共通する眼差しといえる。

実はグリフィスの自然に対する感性は、『皇国』より『福井日記』の方に、さらによくうかがえる。グリフィスの『福井日記』の記述の魅力のひとつに、自然への言及がある。季節感あふれる自然描写が魅力的なのである。日記をみると、グリフィスは毎日散歩をしている。山下英一氏も指摘するように、グリフィスの一日の過ごし方はほとんど決まっていて、午前中に授業、午後から夕方にかけて、散歩に出る。祭りがあってもなくても、人の家の訪問予定があっても、それとは別に近所を、川べりを、山々を望みながら、田園を歩くのである。

たとえば、七月一九日の日記。

> いつものように授業をした。役人が一人来ていなかったが、授業に差支えはなかった。午後、一人で散歩にでた。夕食後、馬で南の方へ行った。西の方は黄金の空に光の大波と火の波紋。東の方は静寂で崇高な連山の濃い紫。黄金に照らされた雲の白い峰はスイスのようだ。一人乗馬を楽しんだ。金が溶け込んだような空に、銀の三日月が見えた。長い橋を渡って帰った。蛙の鳴く季節になった。（“The time for the singing of the frogs is come.）家のそばを通るとそこからいぶしだされた蚊の群れが顔にぶつかってきた。夜、化学のナトリウムの章を書いた。知藩事から手紙をもらった。[39]

グリフィスは授業を終え、いつもの午後の散歩はしたのだが、夕食後、また一人で外に出かけた。夕日が素晴らしく美しい日で、グリフィスは、大空を見渡す。西の方は黄金に輝き、陽が赤々と炎のように波打っている。対する東の空は濃い紫の静寂に沈みゆき、山々の影の上の白雲が、最後の日の光に照らされている。やがて西空に銀の三日月が浮かぶ。昼と夜のあわいの時間。天空の両端の動と静、太陽と月。馬に乗って一人、広大な夕景のなかに消えていく描写は、一幅の絵画のように鮮やかだ。そしてまた印象的なのは、帰り路、蛙の鳴き声を耳にして、“The time for the singing of the frogs is come. と思うところだろう。宵闇のなか、グリフィスは蛙の合唱に耳を澄ませる。グリフィスは八月十一日に三国方面に川下りをした時も、沢山の大きなトンボの群れと、たくさんの蝉の声がした（“many musical locusts”）[40]、というのだが、その鳴き声を、musical と記している。虫の音、蛙の声にも、季節の音楽を感じるのである。

グリフィスの日記の文章は、もちろん日記なので、一日一日の記述は短い。名詞の羅列など、時に断片的な言葉で、グリフィスの見聞きしたもの、人々の様子や行動が、場面として提示されるのだが、そこに天候が風景描写とともに欠かさず挿入され、日記に生気と光を与えているのが印象的であり、効果的でもある。季節の風景がグリフィスの心象と化して、出来事に重ねられることで、一種、俳句のような魅力が生じているといってもいい。七月十九日の記述の他にも、例をあげれば、きりがないのだが、いくつか抜粋しよう。

七月二十日　「光輝く明るい日。厳しい暑さ」。山々、天空には「整列したの雲の軍勢」。「水浴びを楽しみ、川で海藻を洗っている二人の少年に話しかけた。」燦然と輝く夕日、黄金に映える緑の海原、暗くなる

山影の崇高さ。夜、知人を訪ねると留守。そして「一人の女が数珠を持って月に祈るのを見た。」別の知人を訪ね、「役人に期待される役目について話した、外に出ると、天の川が星の光のなかに勢いよく流れ、堀の水に映っているのが見えた」[41]。

七月二十一日「いつもの授業。午後、ぐっすり寝た。少年たちに教えた。加藤氏が木製で蒸留液を作る工夫をしに訪ねてきた。泳ぎに行った。輝く空。金色の夕日。乳牛を飼っている場所で神楽があった。日除け、屋台、芸者、大勢の人」

十月二十五日「美しい秋の日。今日も忙しかった。小さな蒸気機関の模型に学生たちは喜んだ。午後、中野、大岩、吐酔、岩淵と佐々木の家へ行って、静かに仲良く楽しい夜を過ごした。帰り道、月の光が城、堀、川、木を照らして、いちだんと美しかった。」

十一月二十五日（午前の講義と実験の記述のあとにこう記している。）「午後、石山へ散歩した。見事な紅葉、日の光が風景を照らす。白い鳥の輝き。坂鳥が山のそれぞれの持ち場についていた。葬式の行列。火葬の煙をみた。夜、読書。空想、回想。」

連日、このような調子で綴られている。散歩の時間のせいか、夕刻と月夜の描写が多い。雪に包まれた山々の描写も美しい。だが特徴的なのは、グリフィスが、いつも空と太陽と月を仰ぎ見ていることだろう。ふりそそぐ陽の光、月の光、嵐の前の空の光など、つまり、この世の空間を照らすものとしての自然の光に対して、鋭敏な感性をもっているのである。

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

ハーンも、たとえば「神々の国の首都」の朝焼けと夕日の描写など、刻々と変化する空の色を巧みに描いていることが知られている。来日以前、マルティニークの自然描写も華やかな色彩表現で、〝言葉の印象派〟と称された。が、グリフィスの自然描写は、印象派というより、フリードリッヒやコンスタブルの風景画を連想させる。自然のなかに神の意志の普遍を感じ取ろうとした十九世紀アメリカの思想家エマーソンなどと響きあうものがあるのかもしれない。

ただし、グリフィスの福井日記では、自然も天候も、かならず人間の事象と一緒に描かれているために、ここの自然は人間を超越した別世界としてとらえられているのではない、ということになる。ロマン派でいう〝sublime〟、「崇高なる自然」のような、畏怖を感じる対象とされてはいない。人間を包み込む自然なのである。そして、あるいは、このような感性だからこそ、グリフィスは神社の領域に、自然の中で神と人間が溶け合う空間をみいだせたのかもしれないと思うのである。

五、家庭の祭壇　～“In the Heart of Japan”

グリフィスの日記は、このように人と自然を、ひとつの親密な空間のなかに描いているのだが、読んでいて、特に強い印象を受けた一節がある。それは、ここにあるいはグリフィスの日本体験の根本をなすに至った事柄が書きとめられているのではないかと思われる個所でもある。

十一月三十日　外は雨。心の中も雨。家から手紙が来ない。神戸から器具がつかない。無為にすごした。『ピック・ウィック・ペーパーズ』を読んでわずかに心を慰めた。黄昏時に散歩した。父・母・子供の家族が鈴、仏典、ろうそくを持って、燈明のついた仏前で祈っているのを見て、感動した。(42) (Took a walk at twilight, and was deeply interested in seeing a family at prayers before a lighted shrine, bell, book and candle, father, mother and children.(43)

外は雨で、心も晴れない、不調の日。夕方いつものように散歩に出ると、ふと一軒の家の雨戸があいていて、中の様子が見える。覗くともなしに覗き見ると、仏壇の前に家族がそろい、祈っている。父親と母親、小さな子供たちまで一緒に、鈴をもち、仏典を開き、手を合わせて、祈りの言葉をつぶやいている。十一月の終わり、晩秋の黄昏時である。外はすっかり暗く寒くなっていたはずだ。そのなかで垣間見た、“a family at prayers before a lighted shrine”。仏壇の燈りに照らされた家族の輪に、グリフィスは、しみじみとした温かさと、神仏とその一家の親密な空間を感じ取ったのではないか。

さきほど述べたように、グリフィス日記は、出来事と天候が淡々と記されていて、余計な感想の言葉は少ない。あっても、「楽しかった」程度。ところが、ここではただ「見た」“I saw”とせず、“was deeply interested”「深く心ひかれた。」と記している。この場面以外、あまり例がないかもしれない。それほど、深く心に染み入ったということだろう。

グリフィスは、この日の出来事と感動をより詳しくアメリカの雑誌（*The Home Journal*、一八七一年）に、“A Japanese City”と題して書き送っている。

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

山道をたどって行くと、木造の古い数軒の寺と釈迦堂があり、石の塚の大きな塔があった。その塔にはたくさんの風鐸と大きな梵鐘がさがっていて、日の出と夕暮にその鐘から厳かな美しい音色がこだまする。それを聴いて人々はお祈りの時間を知らされる。この前の夕方、日暮前の散歩をしていて、入口の障子が半ば開いている家を通った。そのなかで仏壇の前に、父と母と子供と、母に抱かれた赤子が坐っていた。蝋燭が燃えていた。小さい祭壇に香の煙が立ち上っていた。みんなが手をあわせて、頭を下げて、唇で真剣に祈願をつぶやいている様子は、とても美しくて興味のある眺めだった。お祈りがすんで、父親が小さな鈴を三度鳴らし、また頭を下げると、仏壇の下に置いてある場所から一冊の本を大事そうに取り出して、二、三分、声を出して読み、もう一度頭を下げて、お参りは終わった。ここでは我々は偶像破壊者、即ち、この国の人々が大事に守ってきた迷信を着実に崩してゆかねばならないための科学と、その迷信にとって代わらねばならない信仰の開拓者だが、彼らの儀式の美学に目をつむることは出来ないし、彼等の寺の美しい鐘の音に耳をふさぐことは出来ない。（山下英一訳）[44]

この記事では、グリフィスが見た光景が、さきほどの日記より長く詳しく、文学的な表現で描かれていて、ドラマの一場面のような趣がある。だが注目すべきは、最後に付け加えられた、グリフィスの感想と意見だろう。つまり、グリフィスは、「迷信」じみた異教から人々を改宗させるという使命を帯びてここ日本にいることを自覚しながら、いざ、日本の宗教の「儀式の美学」を目にし、「美しい寺の鐘の響き」に耳をすませば、心打たれてしまう。それを認めざるをえない、と言っているわけである。宣教師としては、思い切ったコメントというべ

きかもしれない。グリフィスは、ここで、異宗教の価値を認めていることになる。さきに見てきたグリフィスのお寺の描写、神社の描写をささえているのも、この考え方だといえよう。そしてここで忘れてならないのは、グリフィス自身は牧師という職業を六十歳になるまで守った人であり、信仰にゆらぎはないということである。お寺や神社を描くグリフィスの言葉に見られるのは感覚的な把握であり、神道仏教の宗教としての教義や制度の理解ではないかもしれない。だから、そこにあるのは、ひとことでいえば、日本という異国の国の宗教への敬意なのだということができよう。異教、すなわち異文化への敬意。この敬意を持つにいたったかどうかが、チェンバレンやバードの記述との違いを生んだ。

そしてこの敬意をはぐくんだものこそ、グリフィスが見出した、仏壇の前のこの一家の姿、自然と神と人がひとつになじむ親密なる光景なのだということが、この記事からわかるのではないか。散策の山道で垣間見た、質素な家屋にささやかに暮らす名もなき一家。その家族が家の祭壇の前に集い、「手をあわせて、頭を下げて、唇で真剣に祈願をつぶやいている様子」をグリフィスは、「とても美しい」眺めだと思ったからこそ、日本の「儀式の美学」や「寺の鐘の音の美しさ」をも感得することができたのだろう。

では、この体験は、『皇国』のなかでは、どう表現されているか。

グリフィスのみた光景は、第九章「日本の家での生活」(“Life in a Japanese House”)の中に、より一般化された形に表現を変えて全面に押し出されることになる。

『皇国』のなかでも、特に読み応えのあるこの章は、ハーンの「日本の庭で」(“In a Japanese Garden”、『知られぬ日本の面影』所収)という作品にも似ていて、グリフィスが住んだ武家屋敷について述べ、その日本家屋を舞台に

した随想をつづったものである。

グリフィスは、「旅の興奮も去って、少し落ちついてきた」[45]といって、まず家の描写から始める。それは築百九十七年の古い立派な屋敷で、代々同じ一族が住んでいた。屋敷は広く、周囲に昔の家来や召使の住居があり、樅の木立のある庭も美しく見事だった。庭には小さな祠があり、さまざまな花が咲いている。グリフィスは、家の造りを、間取りを、部屋や廊下、天井や畳の質感に至るまで、ひとつひとつ丁寧に説明していく。だが、グリフィスは、そこから日本家屋の風情や美的感性、つまり〝日本的な美〟をいうのではない。たとえばエドワード・モースの『日本のすまい・内と外』(*Japanese Homes and Their Surroundings*、一八八五年)や、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」(昭和八年)、ブルーノ・タウトの『日本の藝術　ヨーロッパ人の眼で観た』(一九三四年)、『日本の家屋と生活』(一九三六年)のように、建築やしつらえそのもの、その美学に関心があるわけではない。

グリフィスは、「このような古い屋敷に入れてうれしかった。ここには興味を起させる話がいっぱいある。それは家庭(ホーム)であった。異教の、異邦の、アジアのものであろうとかまわなかった。なぜならそれはまず家庭であった。」(I was glad they had put me in this old mansion. It was full of suggestive history. It had been a home. Pagan, heathen, Asiatic it mattered not ; it was a home.)[46]と言って、その家に刻まれてきた一家の歴史を、その家のなかで営まれてきた人々の生活と人生を思い、想像を膨らませるのである。かつて戦国を生きた先祖の言い伝えにはじまり、代々この家で子供たちが育ち、庭で花や鳥を友として自然に親しみ、遊び、学び、成長して、やがて結婚し、子を生し、ついには親を看取り、年老いていく姿を、人生の節目のさまざまな行事や祭礼の民俗学的説明、家の仏壇と位牌の説明などを交えながら、長編映画のように描く。ひな祭りや鯉のぼり、新年の儀式、主人と家来が盆暮れに交わす

挨拶と贈り物、その他、様々な祭礼におよぶ記述は、外国人による日本の民俗研究の嚆矢と評価することもできるだろう。

だが、グリフィスは、ただ観察するのではない。

「毎日のように、ここが家庭であつたことを示す何か新しい発見があった。誕生、結婚、死、病気、悲しいこと、うれしいこと、宴会など—人生のさまざまな出来事が、アメリカのものとは異なってはいても、ここを神聖なものにしていた。[47]」(Every day some new discovery showed me that this had been a home. Birth, marriage, death, sickness, sorrow, joy, banquet all the fullness of life, though not like ours, had sanctified it.[48]) と思うのである。

そして、夜、家の大きな古い庭を散策しながら、「星、町のかすかなつぶやき」に耳をすまし、「川向うの山にちらつく明りと、樅の木立ちからもれくる月の光」を眺め、こう続ける。

古い文明を破壊するための新しい文明を持ってくるのを手伝いに、知識の建築者として私は福井に来た。しかし、因襲打破主義者になることは難しかった。しばしば自分に問うた。なぜこの人たちをそのままにしておいてはいけないのか。みんな充分に幸福そうだ。「知識を増す者は憂いを増す」というではないか。古い祠さえ、人間の信仰と崇拝を神聖にするため奉納されてきたのだ。この見捨てられた神殿の石を取り除くのは、私ではなく、誰か他人の手にまかせねばならない。かつて位牌があり、燈明と香が燃えていた家族の小礼拝堂〔仏間〕を、食堂にするとは何といやしい考えか。玄関先に軽い木でできた箱が結んであり、その中にサンスクリットと漢字で書いた護符が魔除けに入っていた。そんなお守りを信じなかったので取りはず

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

したが、変った形見として大事にとっておいた。他人がそれを信じていたからである。すべて人間的なるものは神聖で、信仰もまたそうである。もしも私たちの信仰が神聖なら、他人の信仰も神聖なのだ。(49)

I had come hither to be a builder of knowledge, to help bring the new civilization that must destroy the old. Yet it was hard to be an iconoclast. I often asked myself the question Why not leave these people alone ? They seem to be happy enough ; and he that increaseth knowledge increaseth sorrow. The sacredness of human belief and reverence had consecrated even the old shrine, and other hands than mine must remove the stones of the deserted fane. What vulgarity to make a dining-room of the family oratory, where the ancestral tablets once stood, and the sacred lights and incense burned ! I found tied to the front of the house a case of light wood, containing an amulet, written in Sanskrit and Chinese, for the protection of the house. I took it down, for I had no faith in its protection; but I kept it carefully as a curious memento, because others had trusted in it, and every thing human is sacred, even faith, if our own is.(50)

グリフィスはここで、雑誌(*The Home Journal*)でも述べた、いわば宣教師としての使命の自覚と迷いと疑念を繰り返し吐露している。そして、外国人の自分が来て、「仏間を食堂にしてしまった」ことに申し訳なさを感じる。つまり、「仏間」という日本伝統の信仰の空間を、「食堂」という新しい西洋の物質的生活空間に変えてしまったことを、ここでは象徴的に言っているのであり、西洋の文明と宗教を伝えることに一瞬の疑問を感じてしまう。グリフィスは、玄関先にかかっていたお守りを、「信じていないから」と言って取り外す。だが、「他の者が

信じていたものだから」棄てずに、大事にとっておく。なぜなら、「すべて人間的なるものは神聖で、信仰もまたそうである。もしも私たちの信仰が神聖なら、他人の信仰も神聖なのだ」から、と結ぶのである。(51)

グリフィスがここで述べているのは、日本の伝統文化としての宗教に対する敬意であり、いわば他者への敬意だろう。そしてこの異文化への敬意が、家という場から導き出されている。決して、主義主張でも、思想的なものでも、また博愛主義的な観点からのものでもない。あくまでも、日本人の家の中で暮らし、柱や畳や、障子、光、影、空気、匂いにまで触れて、いわば空間のなかに息づく命のようなものを感じ取って醸成していった意見なのである。その分、この言葉には実感があり、重みがあると思う。

いまここに引用した一節の前で、実はグリフィスはこのような情景を描いていた。

「私は宗教上の祭礼について思った。屋敷とその地所の小作がみな提灯をにぎやかにつるす。そして主人の家内中のものが、まるでひとつの大きな心のように、小作人の誕生、死、結婚、悲しみ、喜びごとに共感した。こうして、この住まいで数世紀にわたって、先祖代々の地所の上で、一族が平和にくらし、繁栄してきた。(52)」(I thought of the religious festivals when the mansion and all the tenantry of the estate hung out gay lanterns, and the master's household, like a great heart, sympathized in the birth, death, marriage, sorrow, or joy of the tenantry. Thus, for centuries in this dwelling, and on this ancestral estate, lived the family in peace and prosperity.)(53)

グリフィスが見ているのは、夕暮、屋敷まわりの家々の軒先に吊るされた提灯の明かりである。夕闇の中に丸

く温かい光を放つその形のゆらぎが、いつしか一つに溶けあっていき、まるでこの一族の人々が人生の喜怒哀楽を共有して脈打つ、大きなひとつの心のようにみえる、というのである。祭礼の灯のゆらめきを脈打つ心臓にたとえる所が、杵搗きの響きに大地の鼓動を聞きとるハーンの感性にどこか似ている。だが、この夕べの家々の灯の映像が、先の日記のなかに記された、晩秋の福井の民家で垣間見た家族の光景に重なるものだということは明らかだろう。

このように、グリフィスの日本体験の、いわば根幹を形づくったと考えられる福井日記の一節は、前述の雑誌(*The Home Journal*)記事をへて、『皇国』の記述では日本の家についての全体論のなかに形をかえて組みこまれている。著書にするにあたって元のエピソードが消されたのは、重要性が低いからではなく、自分の心の一番底にあるものだったからではないかと思う。グリフィスは、その光景を、心のうちに封じ込めた。隠ぺいすべき記憶としてではなく、大切なものとして、生涯、グリフィスの日本観、いや世界観を支えるものとなったのではないだろうか。

ここで想い起こされるのが、ハーンの手紙の一節である。

ハーンは熊本時代、知人に長文の手紙を書いて、自分の一日の様子を知らせている。朝六時に妻に起こされて、たばこを一服、朝食ののち、家族に見送られて学校へ行く。午後帰宅、手紙を読み、食事、入浴、家族のだんらん、寝るまで読書、執筆など。そして、毎晩の家族のお参りの情景で、こう記している。。

「夜がふけると神様の世になる。昼のうちは神様はただ普通の供物を受ける許りだが、夜になると特別の祈祷

を受ける。小さい燈明をつけて、家族一同（自分を除いて）祈祷礼拝する。この祈祷は立ったままでするが、仏の御勤めは跪いてする。祈祷のうちには自分のためにするものもある。自分はただ一度祈祷をするようにと言われた。これは家に心配なことがあった時であった。その時教えられたとおりに一言一言日本語を繰り返して神々に祈った。―神棚の燈明は燃えてなくなるままにしてある。」お休みの挨拶をかわし、全く静かになって、自分は読書をする。「これが日常生活の概略です。それから寝ます。」と手紙を結んでいる。（チェンバレン宛て、一八九三年十月十一日）[34]

「夜はかみさまの時間」という表現が、印象的である。毎晩、家族は神棚の前に、仏壇の前にそろう。ハーンがここに描いているのは、まさに、グリフィスが福井で散歩の途中、黄昏れゆくなかに垣間見た、名もなき一家の、夕べの情景だといえよう。

ハーンは、松江でそういう家族の一員となり、その輪のなかに入っていった。そして、「夜はかみさまの時間」という神と人との親密な世界のなかに参入していったのだといえる。グリフィスが心の底で共感した、だが心のうちに封じ込めた一幅の絵のなかに入っていったのがハーンだった。

グリフィスの夕べの光景と、ハーンの夜の世界。二人の日本体験の根源にあり、二人の日本観をつないだものこそが、グリフィスが描き、ハーンが手紙に記した、家庭の祭壇を中心とする親密な空間だったのだと思う。

寺社という場ではなく、家庭という場。宗教家の思想の立派さではなく、普通の家の中にしっかり根づいている、ゆるがぬものとして、グリフィスの心にも、ハーンの心にも染み入ったのだと思う。

グリフィスの『皇国』の一章は、“In the Heart of Japan”と題されている。「日本の内奥の地で」という意味

で、そのように訳されているが、もちろん、日本の内なる〝心〟、人々を支える精神という意味もこめられているだろう。日本のその内なる心に、グリフィスは福井という土地で触れることができた。それが、福井滞在を締めくくる言葉、「さようなら福井、あなたは祝福の井戸であった。というのは、私はあなたの中に真理を発見したからである。[55]」(Farewell, Fukui, thou hast been a well of blessing ; for in thee I have found some truth.[56]) に言うところの「福井に見出した真実」(第十五章「封建制度の最後の年――私の日記帳から――」) なのではないのか。

最後に、ハーンの「ある保守主義者」の一節にふれたい。冒頭で、ハーンとグリフィスをつなぐのが、この作品だと述べたが、このなかで、福井の士族として誇り高く育った主人公の青年は、時代の変化に衝撃をうけ、横浜に出ていく。最初は、外国人の思想や風俗に反発するだけだったのが、一人の外国人宣教師と知り合う。そしていかに異文化を、ひいてはキリスト教を認めるようになったかを記した一節である。

「相手のなかにも、理想への献身の情を発見した。西洋人の理想は、たしかに彼自身が理想とするものとは異なるものだった。だが青年は、彼らの理想にも敬意を払うことができた。というのも、その理想もまた、彼の先祖の宗教と同様に、理想のために多くを捨て、自分を律することを求めるものだったからだった。[57]」(he found devotion to ideals,–ideals not his own, but which he knew how to respect because they exacted, like the religion of his ancestors, abnegation of many things.[58])

この宣教師のモデルが誰かは明らかにされていない。雨森を改宗させたブラウンだと考えるのが自然かもしれ

ないが、おそらくは、グリフィスを含め、雨森が外国文化を学んだ複数の人物がまとめられているのだろう。雨森信成が、西洋という異文化に心を開いたこの場面は、グリフィスが、福井で家庭の祭壇をみて、日本の宗教の伝統に共感をした場面と、対をなす。

そして、このことからわかるのは、人が異文化に、他者の伝統に理解を寄せ、尊重するようになるのは、相手自身が、その固有の文化を大切にする、真摯な姿勢に接した時だ、ということである。逆にいえば、自らの文化を、みずからの伝統を大切にできなければ、他者から尊重されることもない。このきわめて当たり前のことが、近年の日本では、忘れられているように思う。グローバル社会で生き延びるためには、いかなる心構えが必要になるのか、そんなことをも、グリフィスの福井日記と、『皇国』は、教えてくれるように思う。

〔注〕

(1) グリフィス『ミカド　―日本の内なる力―』、亀井俊介訳、岩波文庫、一九九五年、六〇頁。

(2) グリフィス『明治日本体験記』(『皇国』第二部) 山下英一訳、平凡社〈平凡社東洋文庫 430〉、一九八四年、三十九頁。

(3) 同、一一三頁。

(4) 同、二三一頁。

(5) "Journals of William Elliot Griffis: The Fukui Journal 1871-1872"「グリフィス福井日記」、山下英一『グリフィスと福井　増補改訂版』所収、㈱エクシート、二〇一三年、二五六～二五八頁。

(6) 『明治日本体験記』、一一八頁。

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

（7）同、一〇三頁。
（8）同、一二三頁。
（9）William Elliot Griffis, *The Mikado's Empire*, Harper & Brothers, New York, 1876
（10）「神々の国の首都」（『小泉八雲選集　神々の国の首都』講談社学術文庫）
（11）前掲書　一四二頁　他。
（12）同　二四八頁。
（13）同　九三頁。
（14）同　六九頁。
（15）同　六八頁。
（16）例えば十一月五日（「グリフィス福井日記」前掲書、二九二頁）、十一月十九日、十一月二十日（同、二九六頁）。
（17）同、二八五頁、二九二頁。十月二十九日には「神道について話した」とある。
（18）同、二九二頁。
（19）"visse, scrisse, amò."(he lived, wrote, loved.)
（20）両者の盆市や祭りの描写の比較については、拙著『時をつなぐ言葉』第一章「〈夜〉のなかの〈昼〉―ハーンとモース」参照。
（21）イザベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳、平凡社東洋文庫、一九七三年、三一頁。
（22）*Unbeaten Tracks in Japan*, 1880
（23）拙訳、「地蔵」『小泉八雲選集　神々の国の首都』」講談社学術文庫
（24）前掲書、一〇五頁。

(25) *Ibid*, p. 411
(26) 前掲書、一一五頁。
(27) *Ibid*, p. 419
(28) 河島弘美訳「旅日記から」『小泉八雲選集　神々の国の首都』」講談社学術文庫
(29) Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese*, 名著普及会、一九八五年
チェンバレン『日本事物誌』高梨健吉訳、平凡社東洋文庫
(30) *Ibid.*
(31) 遠田勝「ハーンの神道」、平川祐弘編『小泉八雲　回想と研究』講談社学術文庫
(32) 仙北谷晃一訳「杵築」、平川祐弘編『小泉八雲選集　神々の国の首都』講談社学術文庫
(33) 前掲書、四二頁
(34) *The Japan Expedition, 1852-1854; the personal Journal of Commodore Mathew C, Perry*, Smithsonian Press, 1968, p. 68
(35) M. C. Perry, Narrative of the Expedition to the China Seas and Japan, 1856, Dover Publications, p. 403
(36) E・S・モース『日本その日その日』第一巻（全三巻）石川欣一訳、平凡社東洋文庫、三八頁。
(37) *Nellie Bly's Book. : Around The World In Seventy-Two Days*., The Pictorial Weeklies Co., New York, 1890
(38) 前掲書、一一六―一一七頁。
(39) 前掲書（日記）、二五九頁
(40) 前掲日記、二六七頁
(41) 前掲日記、二六〇頁
(42) 日記二九八、二九九頁。

ウィリアム・E・グリフィスからラフカディオ・ハーンへ

(43) 日記六二頁。
(44) 山下英一『グリフィスと日本』、三八九頁。
(45) 前掲書、一三三頁
(46) *Ibid* p. 437
(47) 前掲書、一三七頁
(48) *Ibid* p. 439
(49) 前掲書、一三八頁
(50) *Ibid* p. 440
(51) 前掲書、一三八頁
(52) 前掲書、一三七頁
(53) *Ibid* p. 439
(54) *The Complete Writings of Lafcadio Hearn vol.16*, p.49
(55) 前掲書、二四九頁
(56) *Ibid* p. 540
(57) 平川訳　前掲書、一六九頁
(58) *Ibid Writings*, p. 405

［参考文献］

The Mikado's Empire（『皇国』）第二部：『明治日本体験記』山下英一訳、平凡社〈平凡社東洋文庫〉、一九八四年

R・A・ローゼンストーン『ハーン、モース、グリフィスの日本』杉田英明他訳、平凡社、一九九九年
瀧田佳子　「グリフィスとハーン　―二人の外国人教師像」『無限大』№88、一九九一年夏号、日本ＩＢＭ㈱
山下英一　『グリフィスと福井』福井県郷土誌懇談会〈福井県郷土新書　五〉、一九七九年。
『グリフィスと日本　明治の精神を問いつづけた米国人ジャパノロジスト』近代文芸社、一九九五年。
『グリフィスの福井生活　福井県文書館県史講座記録』福井県文書館編、山下英一述、福井県文書館、二〇〇八年
『グリフィス福井書簡　William Elliot Griffis: pioneer educator author of *the Mikado's empire*』能登印刷出版部、二〇〇九年
「グリフィスから見るハーン」『講座小泉八雲　一』、平川祐弘・牧野陽子編、新曜社、二〇〇九年。
「ウィリアム・グリフィス福井藩に招かれた青年教師の情熱海を越えて、明治の精神を問いかける（特集お雇い外国人の見た日本）」『望星』40 (12), 40-45, 2009-12　東海教育研究所
『グリフィス関連の論文合本――若越郷土研究誌掲載』平成二六年七月、私家版
膽吹　覚　「福井大学総合図書館新収蔵品、ウィリアム・エリオット・グリフィス書状―グリフィスの師範学校創設に関する提言について」『福井大学教育地域科学部紀要』（二）、二〇一二年一月
Edward R. Beauchamp, *An American Teacher in Early Meiji Japan*, Univ. of Hawaii Press, 1976
"Griffis in Japan, The Fukui Interlude", Sophia University, 1971